善迷所圖會

全

ロ 9
3506

ロ9
3506
ロ9
3506

善惡道中記第二編

善惡道中記

頂恩堂駁

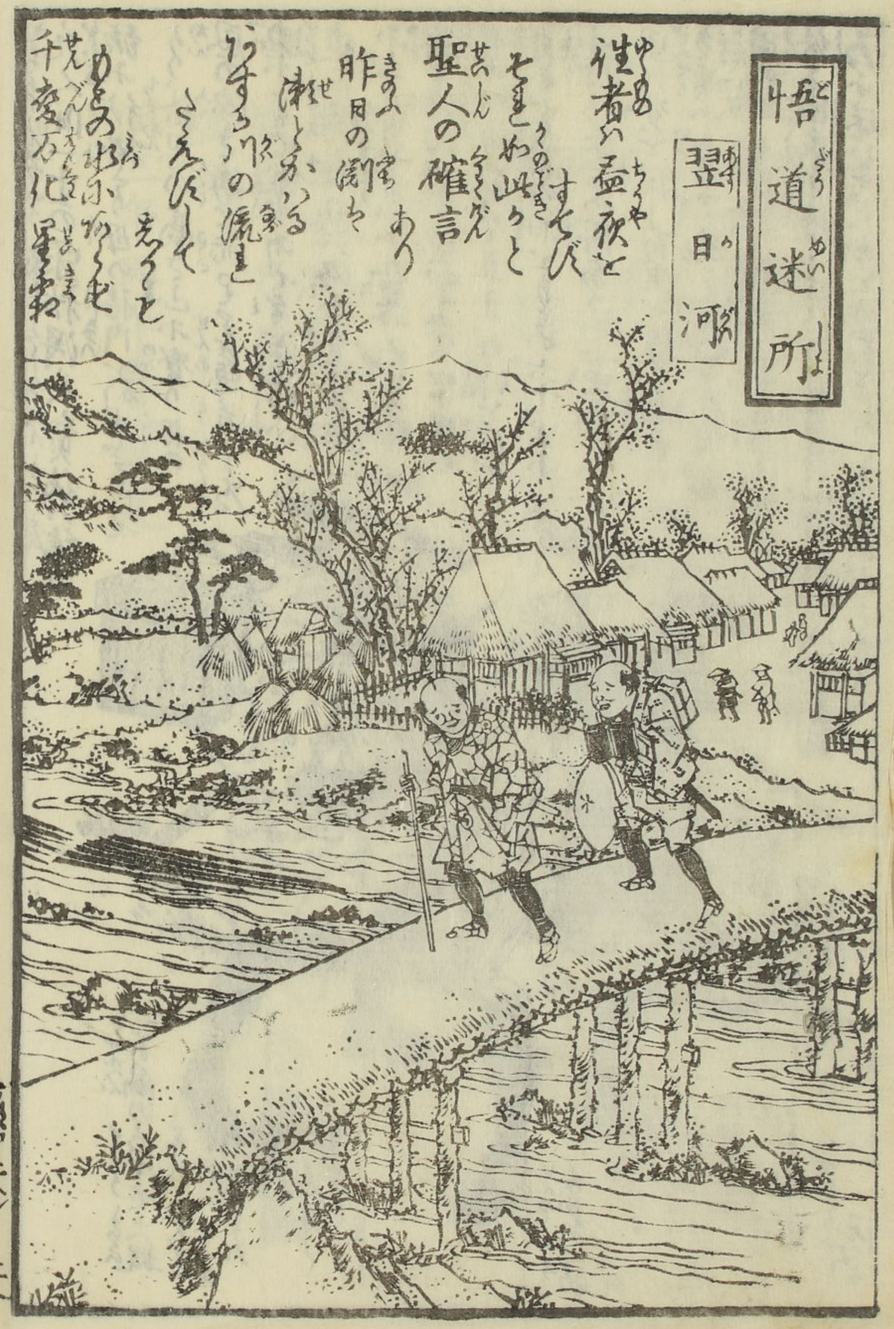
故
横山有策氏
昭和四年五月
寄贈

曩小善惡道中記と題して人間一世の盛衰を旅中の趣ふたぞらへ戯作せり。本ところハ宝暦六年丙子年の印本。善惡道中獨案内と題せり。飛雄亭の著作ふ擬ゑ豐芥子所藏 古人立川焉馬 初名 大通獨案内と題し青樓天明年中。桃栗山人杯發齋 通客の趣を述て。本文の小冊ふ絵圖一枚を添う。其体裁飛雄亭の作を摸擬せ。夫より寛政年間山東京傳。悟道獨案内と題し。或ハ善惡名所圖會と号。基所宝暦の善惡獨案内の趣ふ倣へり。先哲の妙案至まり盡せり。今將糟粕を輯て補綴せ。ふ幸ゆゑ時好ふ称ひ。販元不斗利を得しとぞ。是よりして書肆ハ後集の討求ありり。然ども僕素より戯作を業とせ。筆硯煩多し故を以て。太年再び稿を脱せぞ。猶後輯の需頻なるハ。許諾し

俱ふ棄にようなく。已事をもぢぞ今歳初春。新ふ硯を發嗜好る故ふ
拙き筆ふ稍責を塞ぬき。從来嬰児の為ふ。勧善懲悪の一端とも
あらん欲と。善悪迷所圖會と題をて。樺を嗣支とハなりぬ。前
編と俱ふ高評を給ゼ。書肆の僥倖あらんこりふ支を。爰も名
所の古跡と聞え。晋子其角が鄰なる。萩生の井戸れ邊りふ
す免ぢ。

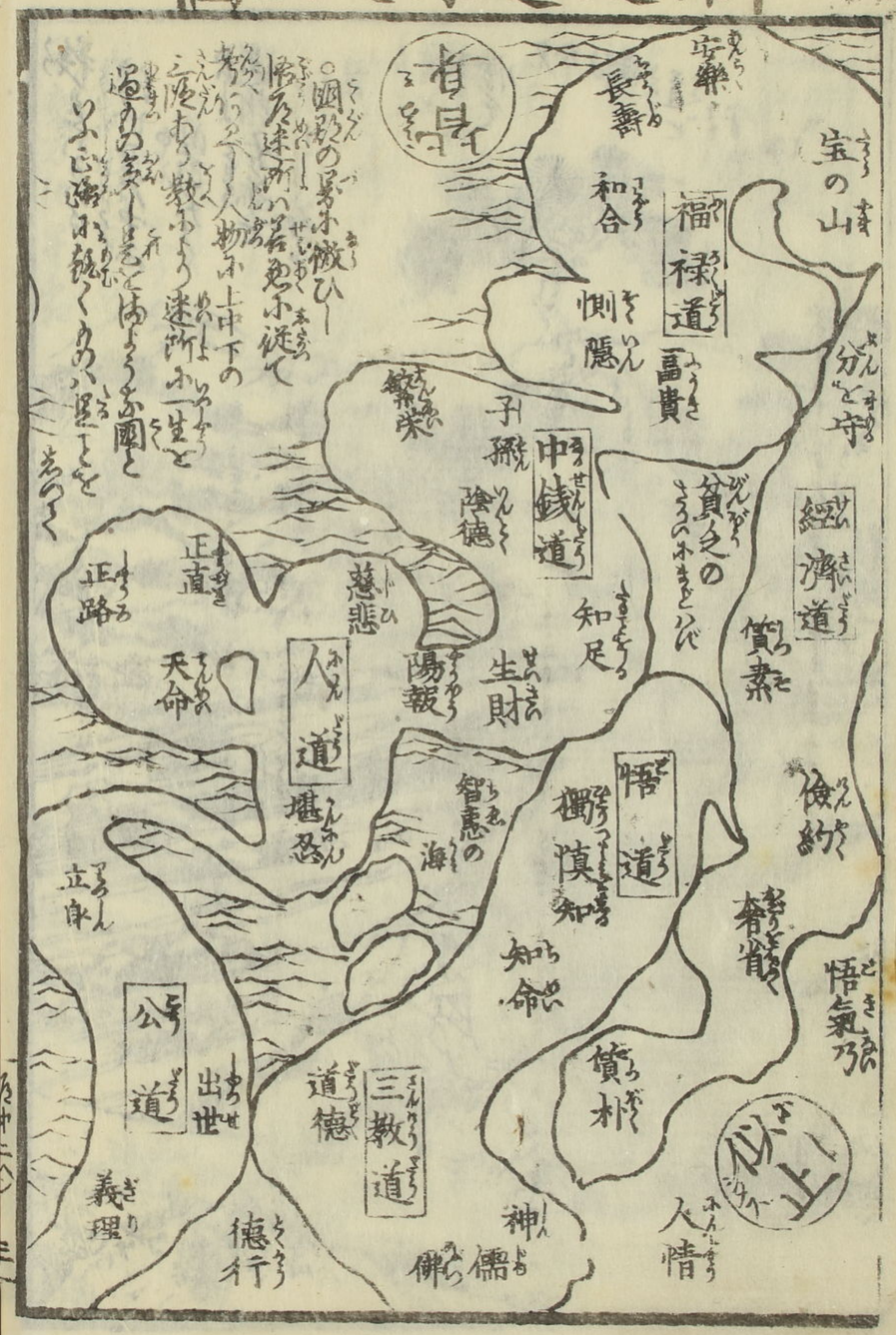
維時弘化二年
歳在乙巳春
稿成
同三年丙午春發兌

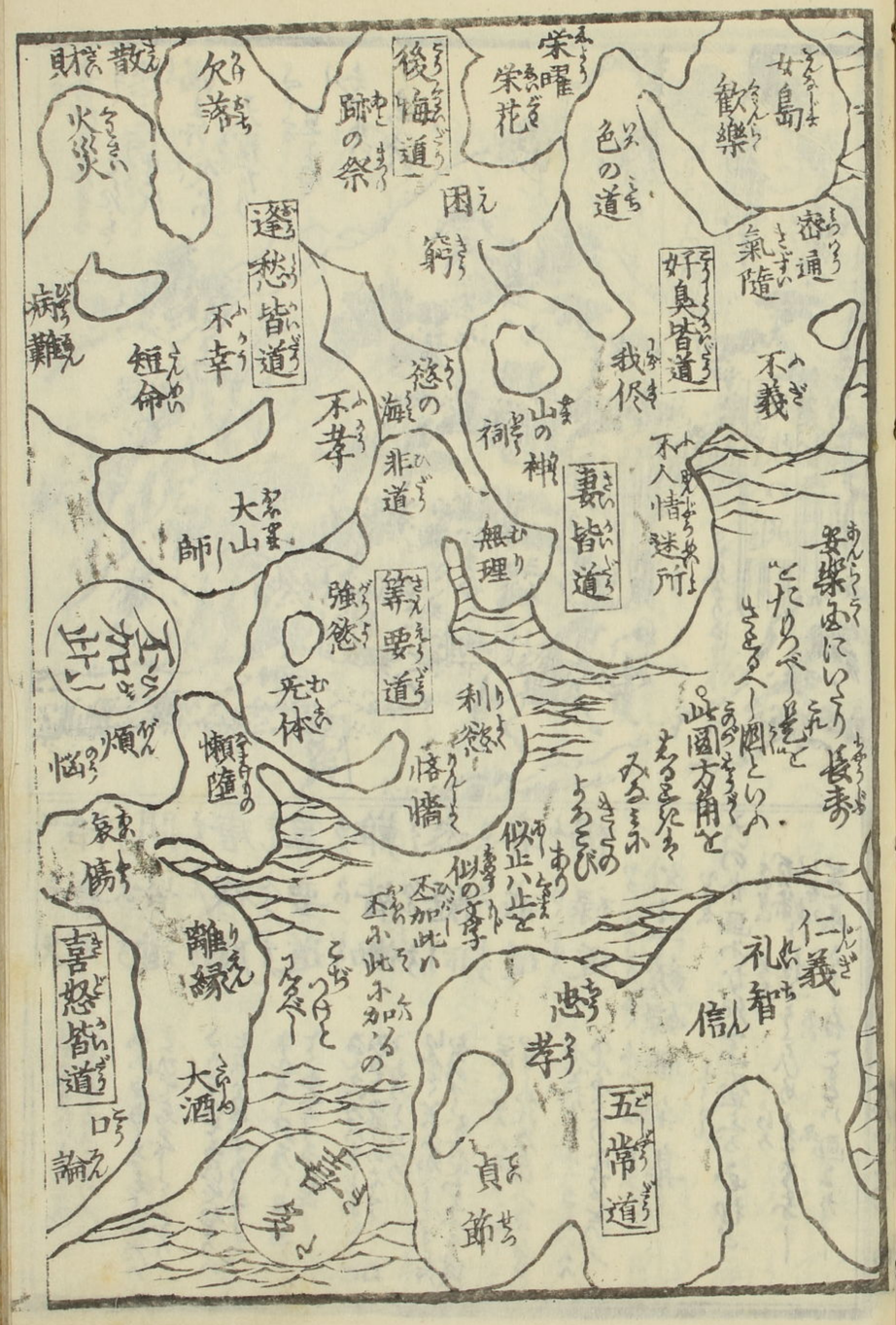
江戸楓川の市隱
一筆菴主人戲誌


悟道迷所
翌日の河
往者の盃夜を
すてゝ
さめ此ゝと
聖人の確言
あり
昨日の河を
渡りかゝる
なすゝ川の流を
ゝ
ゝ
千変万化星霜

浮世の
迷所
道を
悟て
道を
守る

悟道迷途所の之全圖


有見
福禄道
宝の山
安樂
長壽
和合
惻隱
富貴
分を守
貧乏のホまとゝび
繁栄
子孫
陰徳
中錢道
知足
生財
陽報
慈悲
正直
正路
天命
人道
堪忍
智恵の海
悟道
獨慎
知命
質素
倹約
奢侈
悟氣乃
質朴
道德
三教道
神
儒
佛
人情
出世
公道
義理
徳行
立身


女島
歓樂
栄曜
栄花
色の道
後悔道
跡の祭
困窮
欠落
散財
火災
密通
氣隨
好臭皆道
我侭
不義
逢愁皆道
不幸
短命
病難
慾の海
非道
不孝
山の神
不人情迷所
裏皆道
大山師
無理
安樂ホにいう長壽
とたりべ一生と
ゝる人一期といハ
此國方角を
ゝるこたゝ
みるこたゝ
ゝろこたゝ
ゝろこたゝ
ゝ
似止ハ止を
似の字
ホ加此ハ
ホ此ホかゝるの
つけと
つけ
つけ
第要道
強慾
死体
利慾
悟障
懶惰
煩悩
哀傷
離縁
喜怒皆道
大酒
口論
仁義
礼智
信
忠孝
五常道
貞節

悟喜乃
問皆道
唐桟胴
箏要道
難皆働
参隠同
妻戒道
福禄道

外ニ一統録輯余集

国恩山豊稔人舎 神社なり 福禄道中一の名勝なり 当宮ハ風俗宗族を撲淳厚にして奢侈を好まず 稼穡を力め尚古の風を失ハず 五風十雨和平にして五穀成熟し人民豊饒にして海波静に鳳凰麒麟遊びて松ハ常盤の色を更ず 梅に紫蘭の香しきを愛ず 所ハ節操の謹なる縁し亀鶴遊びて萬歳を寿ぎ 恵み限 と知るべからず 此所の地ハ人世身一の所にて万物育生れ山水ハ日月の神徳 しく忠恕の海深くして聖賢の道を出てハ往来の者を誘引して善く神仏儒仰ぐ故ゆへに自然の道筋正直正路にして開ける道なれバ 孟子の性善をまなべバ悪道に入ず 教を尊ぶ 又荀子の性悪なるをまなべバ善に入 遠き数をまなぶべしと諭し

なるも此神の御心に自然に貫かれて人事の道を守りて女一生の行
道に至るまで是事を知り分の分限を無(皆)獨と慎しむる世人この
社に丹誠を懸して祈願一分の行ひを全うするあり長藤紀文

[illegible]

實西山平産全事　東八寺の住持遍照

女房大事　産刻の況おして懐胎十月養生を尚養産の湯水を
除き常に取り出入の取扱老婆の抱深切なり養子藤川女房
[illegible]
家和を続ぐ者降延年まん人倫栄達の始末也好人善の者
ご[illegible]とまりとなり本然性の教法なり[illegible]の

[illegible]
[illegible]
の差別除く[illegible]
しかる赤子の身ご[illegible]

貴賞の絵巻物　[illegible]

[illegible]

[illegible]

子故の迷所

そま岳
あまの天神
子ゑり堂
きこまの路
食ひ杉
掛の松山
掛のかん堂
きさむり山
恵塔峠

すゑと峠
れと色の瀧
あつくの関
乳母山
やしの井
りろ尽坂
子めのやち
子めのやち

恭平山安樂の身哉　身哉ハ宮ヨリ

人道の外街道ヨリ至ること不出在ること御神ハ四方一丁の間

地面有徳天神　天神ハ人ニ

中ニ世ニ皆文くハ嫁ヨリ出ル人ハ

の人性質柔和心直にして孝の道を守ニ仮ハも妻を顧みず

質素倹約を育し上ニ敬ひ下を憐ミ慈悲の心深く姑舅

ハ一生ニ至る所の勤ハ怠なく子孫長久の繁栄ヒ

親族の末に仕ハ義理を尽ひ眷属を恵ミ財宝を施ハ

故ハ天理ハ人徳有き徒者　霊社あり

夫婦石　夫婦石ハ恭平山の麓にあり相伴そハ苔ヒ不支婦の

農民より常ハ見るとも知ら夫ハ妻となりて

妻ハまを助ひ耕作の勤怠ハ二男二女をまうけ

その教育孟母の教きあり

行ハ奉けるべ潔ヒより廉恥を絶り親ハ妻ハ祥を爾晴雨

とハ田畑耕一丹誠ハ怠なく夏の炎暑を凌ぐ苦作を

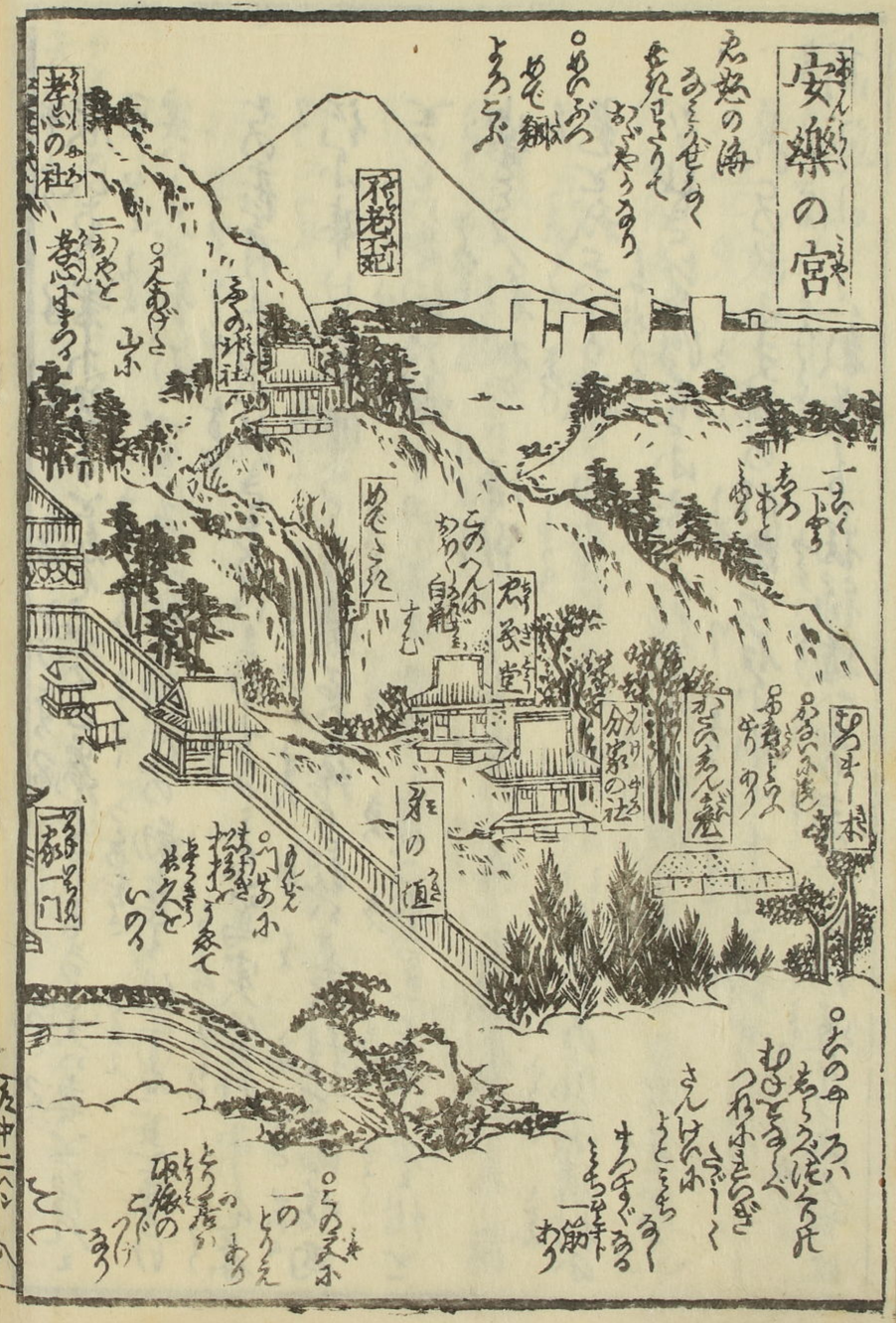
樂ミ夕暮ハ柳の下涼ハ夫ハ妻ハ二姉ハ家食成まとび

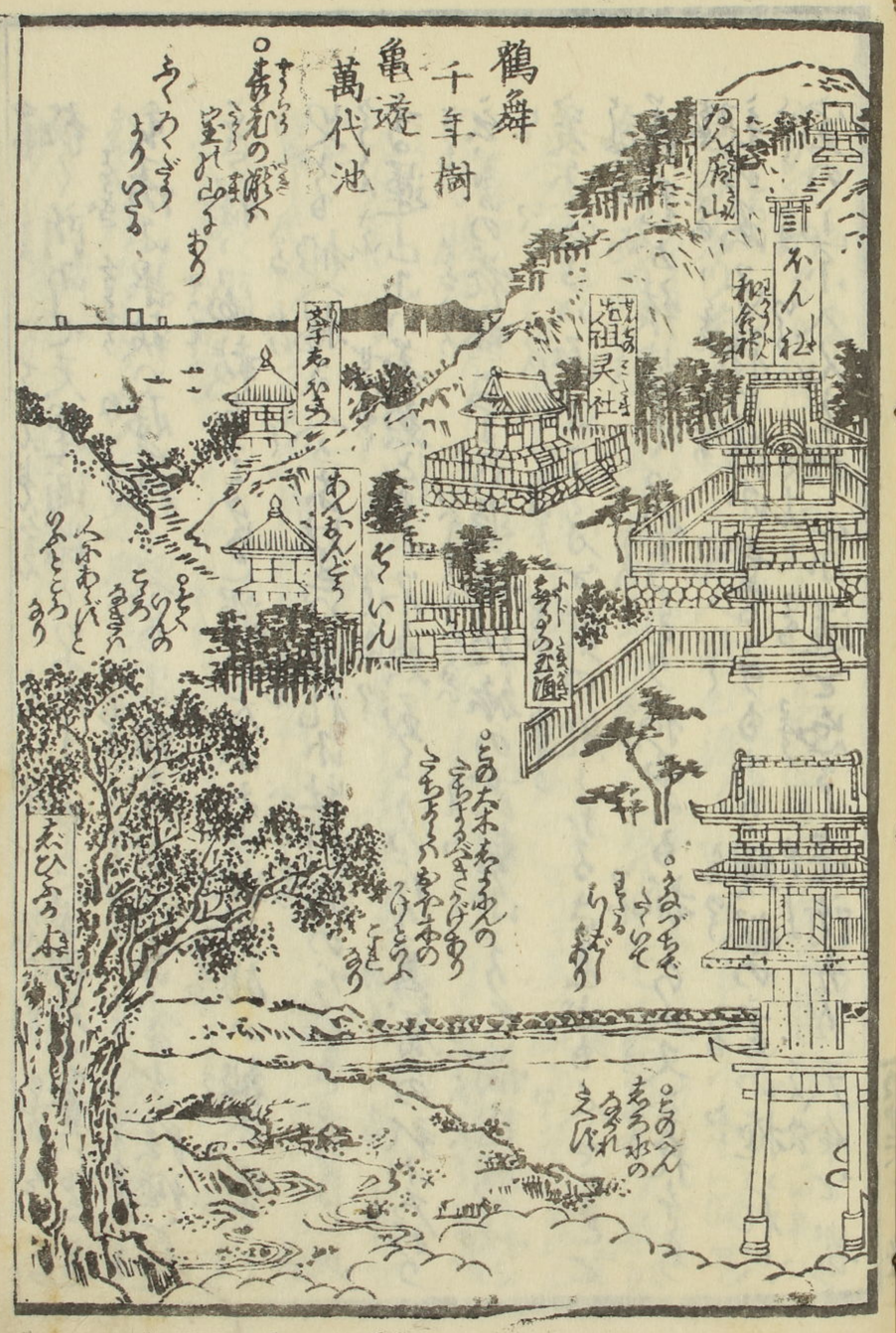
是を我天より授ける富貴ハ知ける貴ハ知けるべその風儀謙村ハ

かなきハ皆潔ハ存ハ

義この故ハ支婦の形勢を石ハ形人吉凶を殘せ

高運山　二教道より福祿道へ至り富の山人ハ道なり平人常に


安樂の宮
不老池
孝心の社
分家の社
狸の酒


鶴舞
千年樹
亀遊
萬代池

敬く所ゆゑ天運循環といふべきなり道
ゆゑ法に果報い様て活るとの人ども果報と八果報といふべき陰徳を施
こそ孫ハ陽報あるべき運ハ天にあり牡丹餅ハ棚にあるべと
いへども棚へ揚る人がなければ貝花に牡丹餅のなるべきやうなし此
言運山に入ハ善悪とりに不可なるものなり異質の教に有り
云業の花盛ゆゑ迷ハ迷の経路の意智にまよて偏に欲の私に
愛に迷ハ逆に迷ハ迷ハ自分の艶の沈まるさまども人をまを
義むに依て様しいあり何ぞも抓とる又ハ
親の為子孫の為に登るるものあり煩悩の雲に掩われ只
宝の山に入んと欲に道を忘れ迷所なり天命を楽

ものハ初る為き道に為ものむ溪ハ欠る患眼前に為ハ
き所なり苦毎月とのハ人欲心深く物を食も不食に為る
今我所用と色宝れ山に為ものんとを思ひ為て為の疑ハを厭ひ
一人の婦人と業月に形を逐河とのハ川をとり眠ハて宝の山
の中腹に為りし先に像に儀風紀て此婦人先生の婦人
ハ矢ひすごく婦人ハ来りしとぞ見を表に宝れに入ものを
宝て為るとの人ハ節制教社種に財産のとを見を哭りハ
しかるに為ものとに為りよりや朝に為とに居合せびとも為に為ず
為て様子より赤の山に登るとの人ハ
のひ一迷所の言山なり

世渡の迷所

高瀬山

出世の滝

立身の泉

増長谷

家の面木

その身の花盛

みりく山

金の夢

家内業者越

世渡の橋

一尺とび岩

うせ木

世渡の重荷

不經濟散財寺 夏ハ用ヰ 等用道の技道ハ

本尊借錢檀寐者迦葉 モウ昊死損者一統散例の御作

身代質堂伽藍堂 食哉不食あと上人再建

空腹ひ甚五郎造立

燒呑陀如来の尊像 はまらん國ハ傳来

左り前の身陀如来

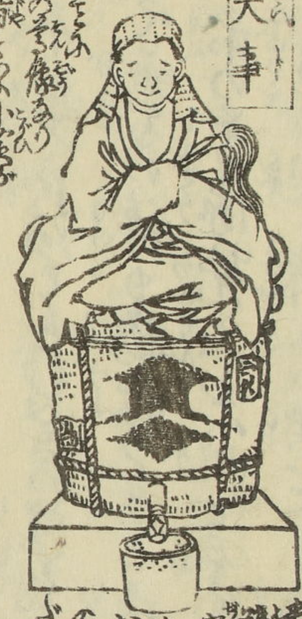
嘗寺ハ平氏ハ平氏ハ平氏

鳥子の紙湯和尚しかりうかりと果敢なく奏ふ能はざる
今眼前に涌出し湯水はしばらく歩人果しそ分上ふ始ハ僅の
穴とあけるふ利ふ利ふこの孔廣果りて大穴となる実ふ方人
身代の山を孤所多く下ゆ極ふ為変なすこと能の
蔕しく鶯鶯多く飛ひ山よ離り火災ふ係り律義一遍
性人教弟の幸者ふ於て穿く鳥有となるを見ふ彼高
和尚ハ隠居和尚となり女房大師事勢を制り長を振
右衆の家来を追出し新ふ経海の古法を更徳まふ我
言ふ暴り第ふ英氏多く古ふ北ふ従て親鸞世間の実会
小進例さまと再勅後見和尚孫の浮気上人世ふ

牛鶴の制すふ家の素所と宜あるる女房大師ふ及ぶを無へも
人情の邪ひと押て第ふ後悔乃ふ親しかりしこと多り乃ふ些
のつふ偽合ふ前も過らず通止ふて親く堂況考ふの
和漢和を一個も行ふ此を死ふ後ふ言ふ離ふ言と
無出ても扶ぶ者を後臣能湯員の遠ぎ生員文ふも百升
とふ言ふ果て長ふのまもむべきハ浮気性人獨奥意風を春風
おくて言ふの種も物仮りなく美見の種も少ふ
左り第の言像焼天ふ人帆と
見と後ふ新ハ妹ふハ楽と
密て農栄相の程天命ふ

不経済散財事之雑物

樽が大事

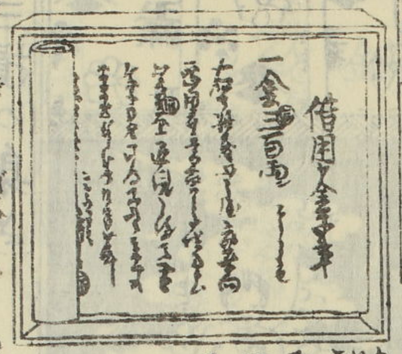


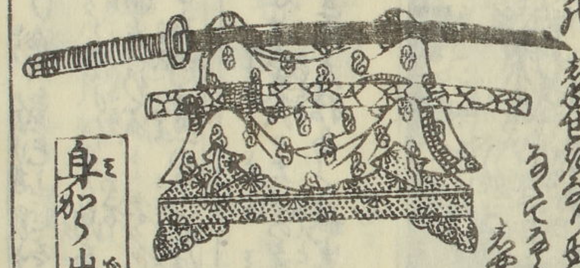
○樽が大事の事は毎日大酒喰ひ

元多如来の尊像

滝乱性人の於文箱

証拠印の真蹟





身から出た錆刀

不取締のおげ錦

○不取締おげ錦の名は毛上北勢の旦人すくあれたるる所あり世ふ人を軍物変りたしと称し各の合戦ふ引ひる者をその表

三損の身と

○三損の身ごと米。大酒の身ごと。突合の身ど。やけれ身ど。りゞ三日大酒あて絶光殺清夏の汁物ありしと生潔

性得大酒の筆

親の扶
金の扶

○こゝろをおごりをたゝべつゝひたすらてめざされれば多分あるせんのぎりの日ぎりゝ多いとのよまえ
ちゞめそたちまち
ちゞれたちなり

○数ふをたゝさいおぶんふ
ゆとかゝるたゝのすゝべ
ものおちこ
たゝべ

分散二足三門額

馬鹿遠慶報
隨所當極欲
多文育結傳

不孝

不知足

○あの頃の月と花風ふいてうの家財のたゝべ
ひとをふ素ものたゝさり成ぬりの重法ふ
たゝ素紙遠やの養者とうひ代の
月菊薬酒　扶ゝ妙蔡　安倫大鶴
なりたのをもんかたゝさ多の大美の改
ちんくゝとうふ大鶴さゝべの他いまゞやき
わゝうれゝうゝれんゝゝあ成ねをゝ永
ゝうゝあんおれがゝゝ文学はたゝのゝひ色ん
かゝんゝ考をちゞゝうゝ合ゝうゝ考ゝとあり

知て奉公する人者ハ彩る慈ひ子孫ハ也かゝび彩て親類他人
他解所御級せんとハ成悪き九尺二間の裏店を一字再興し
ゆゑ不経海敬財支と与ハ後悔を身一の名所なり

南無山仕損支　此の山のそゞ也ハ本今ハ損者を安也ハ
仕換支ハ備蔵の測ハなり奉平乳ハ一文ハ身代家城の
吉凶ハ中ハ何ぞの裏店ハ山稼を来槌の庵と見ハ行し
なり平乳の一文ハ人ハ備と為て法人を為ませる成平
乳備ハ人数ハ多ハ伯母山の内祝ハ奉名堅ハ吉ハ奉する
吉ハ吉ハ無奉ハ多ハ山ハ内の祝ハ奉名堅ハ吉ハ奉する
今ハ一て根ハ今ハ限ハ銭ハ平乳備の為ハ吉ハ

なくなりしとハ

貪楼山強慾持　中残道ハ入る等要ハの迷所なり

本地銭程光闇陀如来　黄金佛　吝番利欲和尚開基

非義非道妙應像　思想菩薩

十一面観是恩

此の貪楼山ハ慾持ハ木食吝番大和尚の開基ハ一年季奉
公の中迷も地乃ハ奉公成悟ハ悪山を潜ハ下山臣僧の元分ハ
山ハ公奉ハ人今の夢ハ元分て貴山を開きハ私慾を神有今者

小笠原氏のひ子孫を因幡法師の相伝と云附臣のふ僧門ハ
三角小ーて事を角孤を角義理を角この角をもづさび身ハ頓滅
結ひ世間ゑゝぶの堂塔仏閣歳字ゑり
抑妻山ハ善要道半一の迷所ゆーて地ハ赤ゆ系ゆ屋ゆき物
止りなり殺風景ハ悪の海深く面の川原く流れこ不程屋と
いる義屋なりその廣大なる限りを考ひ今のある木ハ方小鬱
義世の中を見るゆと知るむこの今のある木といるハ極り相の気。
情光の気世界ハ世界ひ相。過さぬ気。必ず栗。気むづし未。屋すべ
種この気生義理。悪小頂を知るゆ色。愛小悪の義愛るゆ考
ありて。抓る物を離さぬ抓ゆハ悪怨情のふき賀考く光体小

さへぼを握るハ向ハ水小光岸ハ乳出ハ抓ゆハ源ゆ栗義
ふゆ成悲び取義ゆ人義ゆ考ゆ考ゆ第一是より不人株武依
姫源ゆの城跡取ゆ切通し義理不知身不知我知
嶽小富を掘ゆ掩ひ意理那乃を考ハ苦源の石遠志
樹新庚源過新の柵ゆ悪小従来ゆ義の
無ゆを寅ゆ屋毛井の小ゆの渦を源を守城奴有
城の像鬼堂なり像家ゆ考ゆ考ゆ像鬼と
いハ偶小今の表人なり一名懸食甲塔ゆる食楼山の奥
の院是ゆり文育ゆ味ゆ俊約の東法ゆ知ゆ表
番知ゆて今成源ゆ成義ゆ考ゆ限と思ハ大ハ考ゆ源ゆり

利慾の迷所

名門

名とうる木

徳とうる木

偽賢人社

よくの川

ふの崖

黄金の山

古銭場

利慾の道

むけんの鐘

せふ塔

金ぐか滝

かくれが

中銭道

倹約ハ人道第一の要ぶべき物なれども
節ハ人道第一の要ぶべき物なれども
費成ル物ハ是を倹約するハ吾番ハその裏ハ紡ぎ織り
教すること勿論ハ長き浮世ハ短き命を以て甘味物の味を知り
見べきを見ぬ物ハ仮令一生今の為人となり生て食り死して
他人の為ハなる文盲愚癡の知り多り来世ハ畜生と生れ赤裸
と生て更ハ人ハ食ハ多るべし阿房の塚ハ若者を生ず姥ハ塚
ハ生ず妻を生ぜんよりも我娘ハ嫁ハ塚
の接尾おしあり好奥皆乃ハ人多し未ハ良く徒を見ずより
十六利勉堂ハ貧のハ接者雖ども減さぬ中しのハ接成

必て達ハ訴ハ愛ハ安ハ邪ハ善義ハ赤子の脇
ハ孤ハ人の孤義ハ多り願ても愛恩の知ハ者ハ多り中ハ
身程都也相ハ云貧のハ接者常に説ハ世ハ
貧ハ多ハ人ハ多ハ人ハ多く拾る者ハ
人も教ひ多ハ廉ハ利ハ人文盲ハ知者ハ多る今ハ
ハ多ハ金残ハ多ハ金の徒ハ必て稽ハ
寿命ハ病ハ今ハ及ぶ丈今の物ハ多ハ
道程今の乃ハ引迎ハ多ハ形翼ハ花今ハ人の面ハ
好ハ腹ハ多ハ知ハ痛ハ尋ハ子ハ月ハ費係
ハ衆ハ成人ハ世ハ見ハ食ハ今ハ純文一員ハ

多ぜるを以て者を不仰ずとも貴賤利益を極で独せども家
金の炬ひあり実よりも妻よりも金を代るものハ世間に乎
可愛ものなきと孔方大変も流の不働の貧窮ら清
貧紙楽むるなと貧ちより識金を絶ーぐとも変時ハ
事を除て狐をうぐ十の字の下を左へ押枉七ちを不由
種がかけ者ハ誰もて金を貸ものなん是我事を流ちら服
財を後もて空腹ち時冷ハ菜もつぎてものうへ熟ー
奉ち紙ちぶきて名利を考へ蔵るを拾ひ他の拾ちを取ても
元手なを不世紙渡る拾る紙を助ち紙屑ひあり金の中
にありなぐ。今識を不隠ちと貴重ちをいさちを縁ちさ

元貴ハ度ー紙ー我宗門を入ち人ハ涌出自世自在ち
今紙紙ぐる病者ハ人間の屑久間市上年ーの病源なりと
思者の一徳説法ぐ物なる説法ちりの稼ハ愛不安物を
運び十六利細の業為ぐ恨あく伝知不ちるものハ
働きあと識ちめられて利益必為ちと
大山不當妙應　本書の山づき太市の時者れ方ぐ
貴山ハ利欲大師の開基ぐ利益ちり蔵
山建立ちる祇園市一流山薬師分元今説法市支配所
ちり本地不貴物産の業ぐ像ハ骨折ぐ不今我働ちふ吳
弥陀ちとり書云来一ちり

小千米銭多く貯へ宮下の價を以て喜捨為すをき所ありて奸
智小更なる挑撥あり先此麁食報者おおハ欲の海深く帆を
係る和を繋おき後小山多く銭所多く利慾の迷所なり
その道筋へハ迎従粗為れ玉英火の進物紙送り媚諂ひ
一見光の光あり此乃彼乃屈曲を一歌いも今の夢小九付
山小賛るものハ巧言令色を以て表小英雄を飾り裏小
火の車の苦患あり髪剃の丑とゝろ為水を踏類の苦
艱苦を経て山小書る俗者老ハ者小惜を欲虚八百の法を
以小見を法小係るとゝろ人の山小之杉の七本杉なり
今ゝ物俗ゝの橋あり山より玄冥の麻茶庵、英雄き

授し玉山をけゝとう法相宗 ○毎日長の玉 授春法義 ○
結滝の鎖 ○大面の仮面 ○ 修物
他の出方 ○ 狂歌子筆狼の長尾を馬小乗る絵巻物
玉井の水 山の奥小止ル小七面鬼あり絵る鼻付下
今ゝ敵建立ち獲摩壹小俗法小用ひ一為一本あり
おまの庶ゆて他ゝる前ゝ

筆要道金銀都會の湊

大の所小江民とも経済才一の繁花の地ゆ所牧陸小多し
又義力二愛小ゆ一て辯集なく大稲所元所今狼出入所仕
入所小遣所そのゝ大都小郡小素人とも小程ゝの所ゝり入口

身臺の迷所

ごんるの山

ごんるの山ノ麓

浮雲

ごんるの滝

ふもとの人屋

ごんるの木

居堤

うれし井

たのしの木

うれしの

散の多木

下り坂

小平太盤橋有故と濟り一刹二刹の利徳を以て刹摂する小刹の橋
なり後小廢切木なり此所佛縁起に所亜あるべし法師橋
なり。○其時の教諭小坐うと偽今の古底小年城川底の
引道なり。○鳥子の祝洞庭を試ひ出所若者の私慰今
丁稚の賞令小坂道あり。○亭うと酒を呑べ女房の酒
お食おかれなど春うひ絶小一杯二杯の見酒解べ彩霧
あげ中り蓋所の炭蔵味噌塩小ま毛費ゝ〳〵弟上の坂
乃こ方る女房小蔵屋毛費ゝ何一ツ取るもなく榜の
の成陸ゑ小もせべ無見く惜ゝて見るの欲ゝ人ゝ表表
仕立のの見ゝ蔵の縞ひまで人小ゝのむ費ゝく屋の国彩

小こう乃多き弟上の坂乃なり陽居の佛さんまの賽ゝ拙者
毛の後生願ひ御ゝ令ゝ乃小令ゝ本家の編ゝ
坂道なり

好奥皆働色の道　此所小人間界一の迷所ゝ編小ゝ
蔵の山路言低あるいも低いも色の乃と小蔵の河あり
清水橋小ゝて泥水ゝ蔵小貴ゝ丈ゝ乃ゝ深む濁なく一命
ともあやまつと云蔵の桟橋小ゝ令根人拝成用色蔵の宮源
小迷ゝべ小先ゝ乃人毛逆毛あゝ乃人の美貌も再小入毛思
業の外ゝ乃乃なり
○比翼鳥。○連理枝。結の神の社あり　月老神ゝ云。

逢身八契

色の乙好臭陰湯下ある後所はまり

不逢狂乱

障の口説

見會の番頭

合せる氣半

意趣山の飽の畫

下手の惣性

傘の夜の歩行

所々の落顔

青樓全盛の櫻見岡　二品堀の中央通りの中ほかり

有頃天神社　後ろと社を造ること穴を掘りて植え

通ふ神　自然成きりしあるを見れば男女とくこの神の利益

太夫松　緑とろくるひより苦屋の中ほ育ち夏の松ほ多ること

大心木とつる子を抱る数ほつぎき虚の門の水と流れの多ほ客を

出もる柵あり是も高実の水泡と消客ほ偽多き世とあり

多名の中ほ多名ほ及ばず浜て嫌き育も、ひり多ん

鶴乳渡朝ゆきこの意味ほ乳沢ほと繋ぐ移る移少ほ

ほ便ほ移る便嫌便ほとつ新ほ嬉考ひりて虚の門ほ偽高

身代と欲蓋の蓮根ほりも多く穴をあけ大平の焼数のめく

迎蒙朋と臣て勅意の別為若ほ裸宗好院とまる見ほを便け

城を便け新成便け身を実ほ男ほ便深の名ほありほ世ほゆざんる知りのなり

の客小姫て悪とのをまるほ波世ほゆざんる知りのなり

山の神の祠　妻皆同疾拡坂の美中ほありは八丁ほ八丁ほもあること

いほ相伝曰加家西左衛門清安房新乳とほの七去悪伝ほ

女太刀と多び寵相軍ほ我伝乳伝の豪傑ほて思ひ新語

小芳の城を攻へ朝森正好亀成考發衆の濃ほ出法て廃廃

亀きこ新軍配を無へも貝酒大酒ほある者の古戦強ひ新

藤向腹小紙の筆をつん世分不理屋ほ柄をまげ出陣と臣

寄ほを小児のごとく小扱ひ軍を成指揮して家出ひ成き

ぬ者まゝ小角仙人の善悪を言を
他を嫉み義を見て是非を言て不知義を不足を云て漫を
事とする人この神の霊宮小背び忽ち罰に蒙る
なる故小山の神のふまさきざりの神もの
内儀清浄の屋代　妻皆道小在りこの所神様ハ家々俗物
みて情深く深く支度天ハ恵く数ひ常小ハ数を恵く法華小
浴つるへども面小も形さびして経十の業を治めふる孫
の為小子の出家育を家を家なく数ること歳なるゆへ小ものを実
ゆへ者て後孝を表紙清のふ内儀善神と中に清澤の
歴代ゆて家門安全をちりのふとを

逢愁街道い後悔道の続きなり常小諸人偶然とこの道筋小
係る迷ひ所あり身を知る者ハ是小行ずと獨を悲む孤独なり
逢愁街道い事不幸人禍福とも小迅風のゆく登り坂を急
ち下り坂となる有為物変の乱筋小ても大ち形小学ぶ乱で
居ると知ハ後悔を小ふる所あり例ハ先の杖をうゞ先小
立道連をなゝとの

南無三方荒神の社　この社小百日の説法あり之を放屁一口で種蒔と
なをこの的乱とすゝめる四諦なり。諦の数のまゝ仏千手
間小あゝゞ皆後悔を小ふ
勧堂難滝さんよの一北仏上ぶの千手観音　玉鉢の寺あり

[illegible] 父母孫曾の業をそこなひ[illegible]

臭穴地藏堂　若州の産物疫病毒[illegible]臭穴の[illegible]

愚轉堂　夜あり大潮小潮を教財金入をもとめ[illegible]

文[illegible]所痛辛苦[illegible]

此辺すべて産物の金銭を賜へ元日小大晦日を[illegible]毎月

晦日小[illegible]所賀の七覺小[illegible]

例なり一[illegible]

[illegible]

[illegible]

一生の浮きと擬賢人の心ふかいことも門仏ハ今ハ捨ゲ抛つて
ひと筋しく言ふ味ハ咎ハ捨ひ不淫をめ入れ出ぎてひハ是も
換者の偽法ゆて性変あれ貧ちこ塔ゲ仕業ゲ玉極の
体悪火の車の苦患なり陸ゲ仏ゲ入る組ゲもありこと云
借ゲ大名人　此神ハ此義世のめさ新ゆて口流つ新こう
偽るゲ完新逆さ和未まつ平　濱まつこ長ゲ　大名神
不長言えと器ちゲ流つ催仏の云ひけハ清うて切今の
逆海　忽此ハあれ此義ハ「ハ」智編慶大王のめくたで
さるまるゆうハ思ハ身体なり
死外の峰　祝分ハ底禍不偽ぬハ換者亡命の回此逆るゲ

一の長なうん無常の七日ゲより経逆蓮しく拙元城ちうハ
備今くら清雑物の面貴の形ハ編ハこ一益○一ッ寵
○猫の挑蛇見あんまこぐ佛の名号○古墓ハ法墓のけさ
ホなり

金澤山福禄延寿隠　岩山ハ正直正路の表ホなる
道ゆて家の山安楽の新ちいふ法方今根の岩ハ山ゆて堅
い身代こ云ゆて夫婦之白雲遊り林と赤べ黄金ちうる
変るく内うて月出滝ハハい出世経法ゆハ界王第ハ
門ハい福をむうく波風うぬ初まる成業ハ業く
祝ゆて霊ハなり

情おろんこそも何程考へても先陸の第陣の弱の罪死
こゝ云ばと知まて変るまゝ嫁ぐ姑ふなり鳥ゝ親父となるん
一驟用ゐて千里の蔵も帰らぬ三紀あり人間一生の道中ハ皆
日々〳〵光くして鳥の産巣の内ゑ吾道ゑまふ業門と求め
迷所の横乃く這入ゑ正路の乃を志ふ安の山安楽の
都ふいらゝゆべ〳〵ゆゑく小児輩鳥りゆふ
○是ふりもとる迷所ハこゝ乃んふ人〳〵志ゞ清ゞいて
出板いらい

東都 一筆葺英泉画作

御免 御高札之寫 半紙本 中形本 全一冊

主従日用條目付り火之用慎 各一冊
民家必用條目

溪齋英泉新筆

繪本英勇鏡 全三冊

哥川國直筆

繪本武者袋 全一冊

諸職必用 紋切形 溪齋英泉輯

山田常典人人校

百人一首女訓抄 全一冊

人間一生 一筆菴主人作
獨案内 善惡道中記 全一冊
溪齋英泉画
人間一生の私記と道中記を
善惡道中記第二編目作目画
おもしろく名所圖會のやう
なれども花の面白き
画なり

同 迷所圖會 全一冊
同 第三編目作 國芳画
おもしろく二編に作りかへ
其ほうれんそうを加へし
第十 英こうぶつ
世の中善惡の情態をあら
わしたり

同 迷所一覽 全一冊
同 第四編目作 貞秀画
第十 英こうぶつ
世の中善惡の情態をあら
わしたり

同 貧福悟道捷徑 全一冊
同 第五編 西馬作 國輝画
第十 英こうぶつ
なんぢ
ぜんあくの
いきさま
なるべき事

同 善惡色欲二道 全一冊
同 六編七編 追々
出板 近々出板

相撲改正金剛傳 立川馬馬作全 當時現在の力士を集め
一陽齋豊國画 冊
力士番付の模様 行司
と番付の四十八手の
表かわり

力競裏裏相撲取組圖會 目作 目画 全一冊
本文の二番をひきくらべ
諸歌をしるせり

實語教童子教餘師 全一冊
ひらがな二段に
諸歌をくわ
画なり

增補繪本實語教童子教餘師 全
畧画立斎戲筆
画手本淨瑠璃圖會 全一冊
淨瑠璃の名歌を
画まれ

嘉永 正月再刻 京橋銀座四町目
東都書肆 頂恩堂 本屋又助梓

61889

五雄
定

陣